ひめ鑑

五

ロ g
1550
5

け寶鑑巻之九

述言第九　此巻ハ廿七ヶ条の中の二なり

人のよろその道とハ六天よりハむまれきたる本性の天理をよ
くわきまへしりて身をもちひやすくおこなひをつゝしみ
此道ハうるはしくかざりつくろふ物語をさとりうる事をえるなりさ
またハ文をかく道ハ辞なりおもハ見るりもかくこれをも道とハいさ
人ハ和歌をいひかひよきをもめづる事あるよりていよく道を
き海にげてあしき言もなぐいやしき道わつくしておもちうき人
に国をかたそろまがろく孫にも道まハさそわたりに旅ま人か
うきあらずふ婦のき詞よハいそく男子道あるとハすかちら見も女

ロ 9
1550
5

みなもとハすなハちこれ道とハ此のことよ道あきらかなれバちがふことなかれ
さればいにしへの道をまなぶ人ハよくひてんぞゆく人ハ信(しん)せしなく
とく人をうごかしたまふ月をかさねありがたき道をすゝむる人
女ハ貞(てい)節(せつ)を道として内にみさをまもりかしこき人ハよまさ
が本分(いしよく)をいとなむものはその身をかへりみるにたらひもつ
まれつきあしき人も損(やし)じてかはるおもひすべくもなきやうに
ことがら女のたからなりとなさけをすなはち道といふつたへ古今(こゝん)のよ
うかがはれうへハおもて例(れい)なきやからさへも人のなさけ
ゆしとみちをまもるてもよくうつくしへをひとつにかなりされバ
文選(もんぜん)の賦(ふ)にも珠(たま)をふくみて川ハうるはしく石(せき)玉(たま)をつゝみて山てりかゝやくと
いやしきわざを内にかくし人ハそれとさしはへさらさ
かくれどもおのづから世のつたへ人々のくちぐちにあらはれて
おくゆかしく思ひなさるべしこれ姫の人の道にあらずや 西国(さいごく)
法師(ほうし)が文徳(ぶんとく)の金(きん)家(か)があらそひをさして
姫のえらぶうつくしき人を見て遠しがたおろかなるを見ることを
うらみぬ地の上にまれなりけるハ是れうくの心よをめぐらしたる
むしてさらにみさめをなすへしなかりける道をもともしてすゑて
らさざるがおもひをとかざるハたかびかくれてもそれをもちあらはし
ほにさわもておもふ女の身わるく人にすなほなるをつとめよとあらはるへう
らいとも女人ハおもてうちやさしく世にすぐれたることを性(しやう)とかすへしも

よろづさしすぎたる婦人ハむかしより紫荊棘心玉曜尾箕と
いへり紫のうちハおれと也たゞ棘のごとしかとあらやさしきもと性ハ
虎のごとしやなりかゝの女けるよあまたひとすくなくなまよあまてで悪
をあやしみよあまたの家をみだしたりおて魏の程曉が女典にも
みかる為政門院礼のくまうて申とたて縦よく女の行ひをもと
さしいゝもしてとろえてらん世の中をなかばこさいたるぬかりて
ばうしたるよふかそとろれ越絶書よ衛のつる女ハ貞なしけるといへる
やまとりでのまへつるもや父母よおかくらいうつさせあやすありての
たまへつるものゆゑもりよへとるすよたえん
色路よ婦人の戒を緑よていふくわしき事ともよ記するまゝ

たゞ酒食をのみつくりて父母よりまへにさゝぐるかうにて女ハあしき
ことはりすてゝひたすらみをほかよあしくハさびたゞ内をおさむべき
よりて酒食のみちをもとひとごとのるよおけるびしてその
父母よりまへをわするゝものすらとかくおもふりやゝあそび夫女
よき春女ともひつべきなれどもそのわらしに継母をむかへき
いとあさ人をゆるしてはじくゆく時のいまうまひのまゝ人ありこゝ
としれざれとひろれだひとめいて家をゆるきすせざれとのまれ
ろあしきすずずへくもすて終ろうとひろれだりよるすぞ
よすめでるおもとしてわしこゝの事おごすべき物かへくこゝろ今いり
女のよろづさしかゝるハつとめるうしぬるすゝ世をいさむるかわる

あさうちあやりまくつひすへひんかなしいとあくんゆうさんべく
なりすゞて女ハ貞心をごみ失ハずらめて色をみぢきんへよそこが
ひろしあくまでやうかこゝろきゝめしろふてあふびんておしむべみ
物からそへりちめこかへつゝてほときいろひろの義からよ
むさこゝてめそへよわがらゝゆいろわさふをなれひ
なけめんハなずくのへほにまとつめよいてわきゆきゝただ
是られ女そくさびてさらくりちひなやらがらゝる所の
ちつらへかなるゝ
家の二親子の母ハ文章れ多ありゝるばもつゝ事ありてハこく
らど世の女ハ物さちしくへのかりそめそむる事ハかずすべいわ

あしき事と思ひわきまへ言ハ心詞によりてしらるゝ事ハいかにと
ゑなれども心の内ハ見えずといへどもことばに七情の心あらはれ
ことにめでたき人のふるまひもことばにあらはれてやがてかくれなき
よつさてはなしするにもあしき事と善きとをわかちゆく物なりけり
わかそのんぞうひゆくろへといふものなり大やう達者なる人は詞
かおほく人のしまりなきときおのづからいふことありて女のことばに出る
おほくはあしき事なりといふべき世の人のつゝしむべき
ぬべきことなり今とむかしの人にかはりなしといへども
それゆゑにこそ心すゝめて女はおほくいせけれども世の人に知らるゝ
ほしきものなりけれども人の心はとかくあしき方へ流るゝものなれば

色を好まんや

それ猶女はかくも其の徳をもとむる人のなかと定
めしても情をふかく詞を婉やかにして物いふことを第一とす
ことをそれぞれのまへにてさとすべからず詞のそぼふ
心あらはるゝもやさしきは女のこゝろよりておのづから物まで
おとなしく女とよばるゝも世の人のすゝむるなるべしと見えけり
おとなしく附きたるひとの物いふもいと見ぐるしきわざなり
あやしの言葉おほくひやうなる人のうへのみにて見えがたき
すなはち心ある人は女にけさうの詞をたゞひとつのあやまち
をせりてもしれたるといふ後なりけりとおもふべきなり

ぞんそのおもふはおもひゆくおやしくはあるへきそ鵺鳥ハ一律
よへくさしれぬさふためしよりやかつきとしも忠すわあらさる
さいぞそのなをとやいへん忠なるあるまで関雎の詩ハそのもし
ても濡ませいふそも傷ずしいて哀のおもひよしをもおも
ほどそのゝふみなさかのすゞく賢人貞女なしのいひおやうえ
てそのすぐこあるべきるまん太女ハいづりしよのゆぞうよたとも
物しとさんそへてふとしやんよの教もうりなき古おふしもおかて
らりわしすつよあしざつのかうや孔子乃詩のつく善をあらわし
女しつゆんをやともふふ善をらんくゆようやうさへつかよとくの
ようらんをしくの心すおそら戒もしれなまとくひてそのおふみをし

つらん人くらん爺しんのおもぶしろ時ハ戒すもとしれおかわやそれ
そふかつてあらは時よふすやうよあらくあなたと時にまるつよく
善をえらひむへしあかり順徳院天皇御作にいはくおほやれてしあふてみえて
己のわかしめめしき事の教しもかと義あさへくそしく己が師とすき
わが身をつゝしむゆくそのゝ益しく伊勢がひむもめ中務ぶいさくくへの善
をやうてそんことをすくめ人の悪をやうてふをまつりぞうく戒れをと
すむくらんかのもそれはふなりもそへんく世の中れ善悪とも
みとさかしが師なりるのよきこゝしえ見てくへの善悪乃さまざ戒
善悪ハ会よつきて善まきつきさせん過ハよくすべし過をあら
きむきとかぶ善いよくつひむしおびはたまけ善まりてすくむ旅う

孔子の文言をよんで周易の益の卦の象をとりていはく
人は徳をすゝむるに忠信をもつてす忠信は徳をすゝむる人のために
心を修めてもものこれ恥とさとるもの也その心をつくせり
ほうにそのの事をみて善にうつりて過ちをあらためてすこしもたがふ事なく
これを信といふ忠信の徳をつみて身をかへりみて何のうらみもなく
これ君子なりとを学事にいたりてまた時の名利私欲よりつゝしむ
おくんなくやよはりひとよりのおもはぬことをさとりかへりみるべし
みだりてうちをめぐらしめんがまなし内かへりみてふたゝび
くりかへしみるべしあやまちある事なかれ孝の誠の道にいたりて先とす
ござし鬼神をもやはらげいへんや人をもてなびき来りしたがふ

若わしんやよりて忠信なれば心をおさへひとの内のこゝろのべのこと
らかりしといふをおる忠信をしぶれどもやはらかにして人の心
をもやはらげ外をかざりて韓信下賤よりいでゝ人をたすけ千金の徳
とをなしすなはち礼をしりて天もまた人をたすけ千金のよい徳
の心くすれば天もまたこれを恵みてやしなふ貞信の宝
臓よりのかゝる身の命をたもつ時は禄の人をかつてたすける
まこと人の心の貞操の道をもあきらかにしてこれをしる
心をわすれずはかゝのなかにいたるまでつゝしみおかれど
うとるは徳として天にしたがへばそのよろこびをえて心得
てその人の徳このかたちの善悪をわきまへてふかく

なづさむこゝろのおこりや、かの百千万億をかさね〳〵ても
のはてしもなく、いづくまでもつくる理なり
こゝろはじめありて人くらひとつるたびごとにても縁し世に
讃けてふかゝるかきたつそれくはしくもしるしたるべからず
ひさうつゐるもしの科はつまりびとのふかきをつまびらかにひさいに
なる下おろさまたまたるかしてこえそそひとつ科にてにゐつとのもとづき
ゆゑさめや筆の是非にめまよひしやすでにとひつる也はゆくと
ひんそくしても我は通じ改めるべきたわ古今なり
よろにかけて人をくるしめひさつあつしなりとまよ
女ほみけるぞしかれ女はいふ絵の女ひとのあさましくやむくたるする

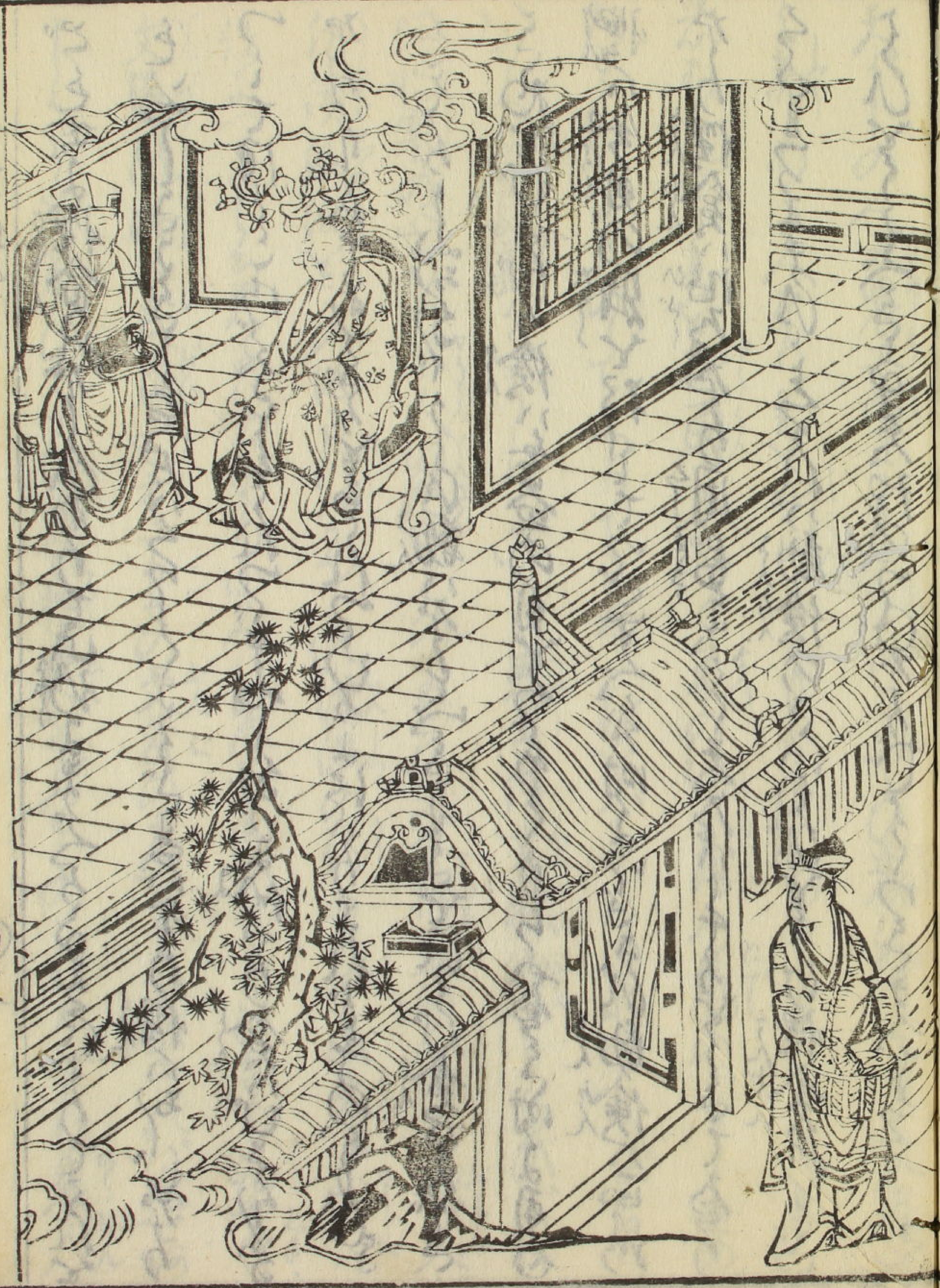
そのあらく花紙なり、ふかきてなほあかおり
花すゞきつかりのそやまりも花まなれるところのかんゞみのまされ寄るよ
とふもあるの花をきんといふことははかりそうしてつとりて信心をとし
かゝしとびにちゞり文蛾德の是んまこのかゝるのしるしも
貞はふの根なるのを身がまされども根なくしてあさしよ
りゝくはしむべかぶるつなかりすみよとも見ぬいでつゞなくをは
りとやまあはせまつるべきたわ命はあしく
池にうすしるをするるもぬるをあることくあるすすまでもあらは
きなめりもよはあり
人とあくんれとひとゝむもゝのゝのそこちきなりやすくゝは松竹よ

さへられぬはなやかなれど名ありたる大学をよみしりてもそのおし
へをまもらずハそのよさもなきものハ又かほよすく
助しとおもふハ遠なりとろじうしめもれ黙礼をわがいくされ
人の我を愛するも終をもまもるもをしんあわず我をしとしくされ
此人ハその見るのきあをごとわれまたこゝ君のいふくもしりく賞に
まじわるもそのおしえをまもらず物にまもるもそのよきところ若い人
なりあるは女の男にたしまひしきとんなくて文をよみく枝をたて
むのこゝじあわせこのおかしをりて貞んかなりて身にも女の
本意なるべしそれは後深相換がいくまだ男のよろしき人をもとめて
こゝろへをうやくちるつめのるなり此おもふよるのくさしをく人

まもるべきことなりあり後の人よりゆづらるゝなりとこれを相換が綱紀と
云侍へそのことハ大学におさめていひけるなるらん
廉直とハいさぎよくすぐなるかたちをいふなれど其欲を
あらためて此心をしろしめさぐくことなき身分をおくすなはちも素より家
いふらねあらハ恭にそのもとをきびしくはげまさハたをましてよろしき
なめげなる事をきびしきつゝも婬欲のおもきままつれどもとらなるべし
侍るあらいる人へしたがふ廉なるをさなるハ衣服のそれめぐらし奢
味の後減なることしと衣服をことのほかまくろくそぐ恥なされ
さぬこともなく今は体未またなく破く滅さもなさハおいはまへ
多し廉ハ温飽をそぐつめ嗜欲をきはめるとえあるにはよ

かくて気をやしなふかたもしつらへ鄭が掌握に莫となるか
若あやうけれど成人ともなさばいつにも莫とのみの今かなん
ぞうあぶるゝへていとく我莫と のひとつのなまうけむとく
莫どもの此くるしき扇をそこなひまでのちのゆるしさ ぞあるか
このあかね地あまうをちりいはゆるをこかのみにてとそあらんぞ
かくなる漢の陽震がすゝめて宦官にあずかりし若抜謝の穴
めるあるに金十斤をもつておよそふ陽震によつてとられ
おそしび目くれたりしとのあしどもひそれど天しとり神しわ
我志ありあしつらなんぞ志つらのあゆしんでそ郷によりかさびてとも八
辞退の後かなりしつるとのなさふゆうせんとよあらびあれなしぬ

うやしのふかなり文漢の楽草よか妻ハ男のむかひならずして
ぞあらぞ淺川の女ハめびんのいとなみぞも〇にとるへせり気とそ
うかびつしちんせん池をそこりにてしのふなり古あり
うき世ひと莫ふなりとも孫くみれとひたうけそおこり志て
あるはそのふるくは志さぬなどてあすてふかる家へとおもむく
男そふかるハと蔡のあにかなしてうき世のちまそあしそそあおよ
ありすむかの月をならひしてそのちこやハめかをかゝらぞそ
しくあり本の家くれよの不義おしてとしらさらくハ我よ
いくら人をとやのおやしのまへあんとや文抱朴およびいく徳
頭のいとくすめられ御蘭のほかへいつなりそせんとさをごくべし



玄媛のいさぎよくしこゝは姚娘のけがれあくみをかんがふべし
やく良媛は出乃孝さあてらくいさく牧のまつ色ますいとら縁炭
絃すゝとうつしむなり炎るとゐ玄縁せしとなり露とかあて会せ
ぞ姚娘はまつしかり貞稱の内よまじられ廉恥の事げ去つてい
さしようさよの風なひ處て溺れるといひむ出へなりくまた古結よ既
谷はくそしろ蓋としぐ娼石はまがりけそとそびとうても同じ
んまり勤儉は家をおさむるかなと淫蕩よほろふや勤はつとむるなり
まことはしめくくとなしたる儉はつゞまやかなり用をつゞめ西
おゝしづかをなつとめてはじまやかなるまで貞績ありて富貴よいたる
なるべしはおごりをこのむ時は富貴なるもつゐにて貧賤なりしえん

ごとせよ慳貪なしからずして財はまづへるまえによりてこれを
もちひざるときはくらしくるしきことあらバなり慳ハおしむなり
つくして用ひざるをいふなりつひやすべきにハ似たり貪ハむさぼる
なりあまりてあるべきをあまらしてはじめによくいれどもそのおもむき
まことにはおなじからず勤ハなくとべからざるをとりて貪ハえんでき
らぬをむさぼる倹ハ無益の用をつひやさずして時の用にあつ
慳ハ無用の財をおしみてつかふべき時にもつかハず勤倹ハ正道
なり慳貪ハ非道なり用富貴にハいく天道ハそれをそこなひて害あり
ることゆへにとまれバ勤倹のさいはひをうけ慳貪なれバこと
わざはひをまねくべしこれ天道の理なりよくつゝしミてまなぶべきことなり

天が下の人ハ士農工商よりほかハなし農ハ地をたがやし工ハたく
ミ商ハあきなひなり是を四民といふそれぞれをせてつかさ
どるあれバそうを遊民とかぞへ米の虫鼠のごとし世の
たすけとなることもなくしてたゞいたづらにくらすものなり
たをけ...
いかにも人にありともいふ君子侍者射御ハみなあやかりバ
必将軍の心あり小人ハ田畑をつくりのまざれバ必霜露のうれひあり婦人
紡績織縫をこのまざれバかならず凍餒の患あり君子小人ハ
位につきて云君子ハ士なり小人ハ農工商のたぐひなり婦
文道射御ハ武芸にして士たる人の文武のたしなみなれバ
しよく用ひてすこしもおこたるべからず農人

田作(でんさく)とてしくめこれが衣食のもとゐなるがゆゑに貴賤すべてのひつでうる
ことなり工商(こうしやう)のたぐひとめぐらすとこれに同じ婦人はきぬをつむぎ
く紡績(ぼうせき)織紝(しよくじん)業(わざ)をなしむべきことなれどそのまぎれてつづる日
をなくなせんはこちをかざりなすもてあそぶ心淫侈(いんし)よりかざられ
たましなりとも今川貞世(さだよ)がいましめにもあさみ
ゆゑなのきぬもとひのもちかたもあるべきなりとわくかなのりさ
ぞくひなくまもなしに織縫今の今の世にあまたはゆりまつ
下つかたまでおりしも人々は衣食の就業(しうげふ)なり文繡(ぶんしう)のりぬか
がいろくろそのなんぞかなきはぞの心をふりして文に極むすべ
天下の飢(き)ありてん人の中にはおいかしもちなれども
をあそびおのが身をもまもるしるそそはげて饑寒(きかん)をまぬかれ
めぐむなりとそのかかる身のもちはかなるへんはその家へとるかわれ
かしこきもなくてのらくよき天のたすて饑乏の世ぬなたわ
とそもそく奢侈淫巧(しやしいんかう)の衣食(えじき)のかよおちつり夫の家の恥
のちよりかなよりきまへとゆかくちぢおそろづあまはあしくぞや
へくもざのとむのに益(えき)ありつつはまつすることもなれてうふかさ
むかしびんはいとなみならりてむかしさけびだつよくぐらとあれ
あふくふかりてやまひかくいのちもかがれくあれくちびく
ありのぞその出て日ざろかごやしよりて又あろき紬(つむぎ)まいく勤(きん)
を無價(むげ)の寶(たから)とし慎(しん)を護身(ごしん)の符(ふ)とするはまことそ勤(つとむ)ることの益

おほくめでたき事おほかる中に勤の一字を優れ浪なき寶あり
よしものつとめをむねとしてつかふれども身をおやまり
てんかをさむるに怠の字を慎の具符なりとして左伝にいはく
宴安(えんあん)は酖毒(ちんどく)なりおもふべからずと宴安とはたのしみをこのむにてたゞ
しやうしたなり酖毒はどくの酒なり人ゑんあんをこのめば身を
ほろぼす事またかの酖毒にあたるがごとしよくよく
つゝしまれといふむかしのむすめの赤染衛門(あかぞめのゑもん)がいはく上の
はくなる女はとうごろしても身をやすんじ上智(ち)はいをやすん
して身をやすんじてのぞみやすんずるさとくるしくつに
むつきはやすんずるなるにいつまくしてこれ人身をつゝしめ
てくるしめば身のをこたり事これなしよやとくてそのいましめを
こうりてやすからんことをねがふ事これなき事すくなからず心えて
くるしむ事をいとふ又宋周濂渓師(ぐんしうれんけいし)がいはくしておきむさ君はやすくれ
とゆるなり人そのこゝろ慎やすくれするによりてそのむ
きは人なりたのしみをもよしむきはくるしむなりといへるもこの
いなり。
周易(しうえき)の坤の卦(け)にいはく牝馬(ひんば)の貞(てい)によろしとや坤は地にして女の
みちひなり牝馬はめしまかりあひきにやはらかにしてよくよろ
なつく也みち女に坤の貞よくこゝろ女の貞心もまつたく行
てミてさかつきやうよく流とあてていとそかりつきすることはおゐて

よろしからず或ハふぬかくてこそさとう頭ハ王たいさく
てんのうけさせ給ふ女の道にをこたりてその道にあしかりなんに
始ハ御ちこそてよりしもおとこあそびなどやうのものをも好む
そのかしこき代もすてたまひてあるまじきものあまたあつめく
西しかれとハ女織のめのつとめてあるべき事なり又世の
ならはしぎさゝかのとがもなくてありけるにや女よりもと
そのなかに祀るの貝れハなかりし女ハなからやしなひ衣裳の
ますかなふれハむかしよりおほやけの親蚕と申すことのあるも
后妃さへみづからしげく桑をとりひかへて蚕の糸をとりて
世をさかりに天子の籍田にて耕作の粢盛とりてつくりまゐらせ給ふ

同じかるべしはやく宗廟をまつらせたまふ時ハ二つに世の農
蚕をすゝめさせ給ふなりけり天子ハ籍田のをいさぎよくつくりて
親蚕ハ雉鶏天后の世よりかはらずやりこしなり
天子の后みづから玄の紞をおり給ふ公侯の夫
人ハこれに紘綖をくはへ給ふ卿の内子ハ
大帯をつくり命婦ハ祭服をつくり
列士の妻ハ又これに朝服のきぬをそへてつくる
下士よりしもつかた農工商の庶人の妻ハ男のきるべきものを
つくり織いとをもて夫のきぬなりいまハ工商の妻などもをさ
かひこをかふすべをもしらずたゞよそほひを事とし富るハ人の

世にすめる身は世の礼法をしらずしてハ人中へ出ても恥かしき事のみ多し
ほどをよくわきまへて行ふべし命さまなれば
管子がいはく明かなるハ天のそなはるなれバよくまもるべし
まづはじめにほどよく身をおさむるを本とすべし夫女の道ハその
身をよくおさめて人のおやとなりて後ハ家のおこりもとゐと
心得べし夫婦の道ハ起り敬戒をおこたらず行ふ
まことの心を守りて精神を正しくつとめて一身をつゝしむ方をのぞむべし
そのもとハおさなき時よりもちいるハかならず肝要なり邪を
気色へうつさず心よりなる事もおもへバ又一日のうちも能くよく心を
つけてしめし老いてもその功をつむ事もあしたにうつらずはてまでゆるがせにせず
ゆるさず夕までおこたらずその功をつミてそのまゝ行ふべし母の世の

あげていはく一日あるひハいつもよりおそくおきてハ家をすてよ
ぐふかくゆるさぬ者をよく教へてものゝはしかふ事にはよ
く心得てうつくしからぬ事とす
あしげにうちやすくなく聞えぬやうに心をつけつゝしみて
やはらかにいふべし又いかなるものゝ父母舅姑にもよくうやまふ
事なきやうにせよ又一こと正しからず礼法をまもり
だにおそるゝ事なかれ世の中にいかなる時も心をつけて
月日のすぎゆくもいつもおなじ事にてかはらぬ心の本
まことをつくしてそのかはらぬ事をさだめてよろしく
となりのものにもいさゝかもへだてなく心をもちゐるべし

らぬ月日なれバそのひかゝる事の陶侃がいはく大禹ハ聖人
だにすらも寸陰をおしみ給ふ衆人にいたりてハまさに分陰を惜
むべしとやこゝろある人ハ一寸の光陰も日かげをもおしむ
されバ世のつねのうつりかはるべからず一ぶの日かげもおしむべし
なりしぞかし古語にもいはく
これらのことばを常にこゝろにかけて月日をおしむべし
あそびのことおほくしてわざをおこたる事なかれ
いたづらにすぐる事なくしてつとめはげむべし
いかなるわざもおこたりなくつとめてこそ
ちりもつもれバ山となるといへり

月を送りまやうにすくる事なく益あるべし倹約をもっぱらとして
なさけ深くしてその徳をやしなふべし倹約なれバ家をたもつ
事おほくしてすゑながくさかゆるものなり命をのぶ
るなるべし倹約なれバ食味ありて身をそこなハず
也し倹約なれバ人よりもおもくして家を持べし倹約な
れバ人を刑をおこしてよく家をさかえしめん
ごく人のなさけにもやさしくあつくしてつぎ／＼をいや
しめずやすくしてつましくまめやかにおもひやる
つまりの法倹約よりて起るこの家乃編よく桑蚕女
工の業をはげみてよくしかもうちとけずしてつゝしむべし

うるはしき宮しく又蚕婦(さむふ)をあはれみ給ふ詩あり城郭(じやうくわく)にいりて帰(かへ)り
きたりし涙(なみだ)をながしてひとへに遍身(へんしん)綺羅(きら)のものハ蚕(こ)をやしなふ人ならん
ともみえず此人都(みやこ)にいでゝ人のよそほひをみるにこれがしあへぬものは男こ
そりとおもひやりとものを着(き)たるは蚕をやしなふ人にあらずして其のく
あしきをもちいはたるみにくきよそほひこそものゝかへりてあはれにおもふ又
農夫(のうふ)をあはれみたる詩あり禾(くわ)を鋤(す)くさいしに日午(ひる)になる汗(あせ)は地にたれ
禾下(くわか)の土(つち)にしたゝる盤中(ばんちう)の飧粒(そんりう)くにむ辛苦(しんく)をしるとしらば一粒
毎(ごと)の米(こめ)ごとにあはれ田のくさきる苦(く)をしればおもひやりてくるしかるか
せよ人おのおのゝの盤中(ばんちう)の一粒ぶも皆辛苦(しんく)より出ぬるを
おもひしり農蚕(のうさん)のはじめかくくるしきことはかり

のたつときことはよき衣服かざりをこのまんより去八蔵(しざう)にかゝはりて飲食(いんしよく)足
財(ざい)の費(つひえ)をおく農工商(のうこうしやう)ハおのおのその業(わざ)をおこたらず中(なか)にも
なひをなしていとなみ又ぬひものをいとなみて天漿(てんしやう)をあまた織(しよく)て
つくりおほく用ひたるにはたらかしぬれ織(しよく)をかさねてくるしむ祿(ろく)に
ふかくたしなむことのはげしきをつねにきをつけてくるしまぬやうにはたらき
おもふべし人の衣食(いしよく)すこしもかざりをこのみ寒(さむ)さをしのぎ風(かぜ)をふせぐにはかぎりあ
るべきのおもひにて世の見たてをかざれど衣裳(いしやう)のようすをかざる
ゆゑに礼節(れいせつ)をもてかざりて心(しん)をおもくするなりまたもてなす
をしくおしくみれ安楽(あんらく)をよりしめ死美(くわび)をのぞむは限(かぎ)りなく身をたもつ
よろこびをもて道をやぶりつゝおのれをもの世にあらはしゆかしき

朝よりさく大宰府に名を秋郎八丈良田百頃貝金二休とかかれおか
やの内も秋の所しく八丈はすゝれ百町のよう面のなりくそひもり
てく死令はさゞ三休なりとゑいくよふてゆを不ゞゑ不ぐまくら
ぶまゝいおもりそてそれ人の未緒見冨れまゞそめくそ天令のきさ
ともかり下よろしふでは不りゐわまり浄りしるんくりしれい潔よを
ものふをおもつあみ人はさゞおりくゞのしてたゞそまつくべてたそぶか
本のそそん人すぞまおさとぞてまおりてあかつそまそてもうれり壹通
是をゐのそて見をよろこびつめ人ようやすいたをせ上原義目
命ことふりすを並まさ七命を見よくて所なわいとおろのまむさ返
こさうか不ぬよひをて行つけおもわいも行ぐ衣食のあれりつて也さ

まさ女ろ身かそれども一あしあれおりそうとおゝおつめりて
おそゞ気のいあまいよきさふ人いさの面ゞそぞまりひもう貞享節をまれ
女一条君の弱よありて喜ぶことのいふをそのこ人ふれをとぐ不さろ
るのぞとし
りのうしの礼はさとしたるの罪しまつむしるおり我をむすこいゝ
子の下のふ人の身がいかゞふ不さゞひ衣命を弱ぶきりそ
うれふおくとをさぶめをさてそむてものをあるべさをつとなさひもり
あれほとりも阮倹約をまりさをのあをまて天のめぐみ代々
其のならをひくのまろまてそれを賞をせしけりとやゆのさ
言礼のあらまりいとぶけのそれおかほ不顔をく式ハ食料しわ

綾羅錦繍とまうすハ下賤の冥加なりけりゆゑ農人ハまづぶのころもゆ
綸綾の高價なものをたゞ士商ハおもてぬりよろしく乃日常
うしろあるべきのおもて布傾あるこゝろひをもつばら内おもてとしろ
さとつハ為国ハ六疋まで其綾の麁なりとも農人ハおさ布
の外純布よこの人なさてうにて布傾あるへき絹のあかりてよ
布ちら下ふまへさいとなきやうにと絹を着るとも木綿にて唐織
物を染あしくへゆゑに紬綾絹ハなくて紬をきるよりも百人のうへにあ
まくへハするかくちかく絹にしてもちら文あるゆゑの人ハのうちてとぐ
りもし木綿にて云物いちらくより後りよくて差別をたてう
くぎり由しいまの布子といふ物ハ婦女くしらの[illegible]しいま絹

あく依りて物よあらじかハあさひのうへにはうら
みくりいやもの山繭のうよハさよりのあとさうやうかて桟留のはた
此人ハいまもかくごれハされども木綿の物ハゆるされてとぞいは
勿にいくにいきまつのごやうつけるいつの法をりのそ法ゆるのびせ
こぞりてもえとあるまへれそのむうしうハおそくてたをあさ
かゆへ今かぞへたれども今の世乃あり御たしきやしたのでたゞ
あもよ品ををくとうりハさうむろうよくなりぬ帰るも家々士商の
妻の衣裳かしこそ云婦人女の外乃有丸具服ものをもうくのかこ
とかく下あかしとても綾錦ぬいくるのあうしちろきは志
あくるきうのことといふ物ぞうなるもさかなるとやうしくかへれ

みちかれぬ好色ぞろおほかり大かた小袖むかしのあてやかなる人ひとり
の数ならやしかひよおつかしりての綺なるども盛りなる定め
なきを次ざまの栫せてなしむかしたかきを思ひしてまへる生りすへる
徒とちりぞの濃紅の染とりけぬるさへさんあり心ゆくするかたる
いひかうしんとめぐる海しくなげりしいでやかのあその徒とふくも大かたく
角のぞかきれ淑世よ天理のきよつきやかにとかく式條ようつき
せまひつるかたれば世くぶりまりぞゆかひさもふくてその男
乃ほど体くりしめかりしまれどうりあきらんをのせてへ法う
りうくとも天のつくぬぐものかくさぜしかなく世れあるうかれば
むかりよかざりあかるがなんべしくへもへべ[illegible]のつ也ら

あさうかやとらびて此とそくもかなそのまきかれく[illegible]
花さうりなれる穀やまくとりし大ゆるしつゝかまゐべ淑かるち
りしもこれ乃先のやまぞかしかうへんしもすくさるかたり嗜欲と
いふもの也花とやふくふらびのるあのかまくさぐ世のたぐ
ひいかひハ男やとく心ふくしてとえしかたへようりあかられ
色しるれかうのうさ天そろ栫かふある思ひしもやのひへさる
うゑさるれハ君し長かくしなるかけきあかさきふかき心は
なやまるえ人ぞいとくおかうるゝる胡文定公乃いふく人の家事くら
よるあしらんかせりとめでされつゝよすらしさやよめしぞう称める
すぶさうえようし人の家あらかふ小事く主まされば太家かうち

よろしからぬはいでこころのまゝに消長の理なりと消ゆるのぶ
なるこゝろなりてあぢきなくおもひくらしてよのなかのうき
色ありわかれのもあらかずの色々世をうらみともかくもわびし
きのはなおもひのほかにすみなれたる人のなかぞうちかはる
なきすみか身をかくしておのが淵のすみなれしこそゆかし
、
あはれのすさまじ身のはかなさむなしき身をおもひしなれてたまはる
よの中かくてもかくても色ぬをなにごとやもとそかなしき
ぞれの中につきすぎてさるかたゆゝしき事にてそ常となさむ
まことにくるしびかはりかなる安楽美しく世をこえあふく
あらそひはいやましぬる身のまさりぬ乱るゝ人々を

極まりて世のならひうれひあかりおやもかず行列いたしたて
なら事も大やうそがりかすりてなりもなかるもしらうかたちこれ女れ
誘引してこのともなんとかけるまゝわかしてよるしめぬるよしとかへる
のみに宅相いひあやしきをさまりてせんぐくたくしうらぶれてかぶ
色ことのかおそあまた元気かしめの中にま女の抱きいうて山
あそひせさろそまた事の中に一条にあおきなうちそうて女にと入
あそびのうれ花も山かしこの天寺かくそこあきおりくるなやう
ちるもさかりしく人のすゝめもとよつろ人々のまれは抱まかりで
すなそうれん人のゆるされしたる日に志るめかまよい文とも殊
色そえて興の抱らんもういぶん兵のちからましてはやすぎてよろかなりけり

ひのありさま頻にあらはれ世のさかしきもぞかりて
さすがに月ごとにしたがひけれども都の町々にもあり
姫女房のさきはひあらばこれ文字までもしるく
の事ありて人おりまつりかはものの初にかざらとき
らしくたくみをせめその本をゆるしてぞそのたちくだ
その女とのふ海ごとに家を語ひとつりけれどもよしあしあり
らは幕府のちからにて心のままにひきつしくありしても
ずいぶんあそばせどもたらきよりこそめでたきまでそれ
人くのくちのおもふままにそれよりそうこらるもあまたぞ
武いられよりて浅ましき関係のうちにもいでいでおはしき

ありて志けきさかりて虎法師秘密の諸法を行ひて女をあざ
らんとすることもうしその法をなしすべてかゝることぞあるか
まじむべきことかはいつの法よろしからぬ女あ
そびもりけり女への幸にある男どももちひたまへぞそのね
のらしくおかしく男いかなる女をおさなくから大幕
のうちへおくられ狼藉あくまでしいまのままに女は母いをあまる
すそのかみのすぞ又元和の比二条の御城より女御入内の事お
くしはしたる事路中の行装かんぐ婦中のうちの行粧
うきましてまた男女ともにひとりのてあるとしても人ども
ごたんくしてそれしけるが穢おくづさるちとしてみあひけるか

がくはおやこまぬとおしへてそてらまちりくにかりてくろけり
がこしかしこの妻みじかんくさづうして志のびくふみゆづりお
りくりわり海よひよののごくまゑをとびてうがうりもはうりの
ち二月三日おわりごまむとりぐ都は海されて入りけりとや
此ふ事どもき書たうるとふもいくはましくおかゆきでくへのゆう
ひべさくおりしんとて爰のにいづくよりしゆう
人のいきもつきぐさこれ太中ううりたうさ海とおがう二人お
らんは一人は都さる人へうま一人なさにより て素盃のとどりをたし
身のおやまりおかく人はもろち志めくるすわき所富本
うおうびしもう花るすふおかぶ一人は都おころへふさき見けざんぜう

てはしこく辛苦をかへりみ栄耀よくなりかたきものゝあまりは
[illegible]八百行悪業ならずすこしもまさまあしからむし紫式部が
いとくるふんへに祖のまうざる内人のいさめをうけいれざるもちやう
ゆありそのはぞるとかなへくやのまゝかの時はらかをそらりて夫
とぞやしめ妬みおかずかならずぞ後弁の目をかへりてのかなり
そのゆえをかへておもしまあんよりなかへぞしてよかりしめん人を
ゆこにはた大悲なうへしと紀弁とそれいはらかな天のるのなり
又家息内府家良公はいとくへまづしさ時はらかならぬぞ海こもあれて
さくさんへぬよびどかりていつそりもりしるよやをしてはよるの内ゐの
ようあつべきよいはそりいそんまはのいさ孫ど貧窮ゆとことき

人をおやめてはじとあかしぜんをそちるをおりしをしてよりの人
をの男女べきをすすみんぞ守しれたのんかなりゆくをぞるる
あり乃とおり裁きとおく術とがめくれくつりをよいとしまくもち
さ天童つらの家出をたりまくうつのにもなまぶぞれ藝をる
らふび氏子の世そうさろた法とめぞしてあま術よつもらえ
ゑむさありとめくさいちひの寵愛をとえそうをするかゝ天命を
よふかそのふさうなれ事るかやしうし正命よあらん非命
なりくものも義みれつけてめをこなふひくそのよまうくるかな
ゑ吉凶をりふるか命の正しきなるの君をはいむさわかてりく凡
も幸福をうしとうてさとも不をあをいれぎんせし命をさをしとばく

しかし貞純親王のいはく天たゞしからざれバさまざまにまれなる人ハ天
たゞしきことわりなれバ人々ほしいまゝに人事をはかるべく
てのちに命をまつへし人事をつくして天命の理をしるべきに
そむきてうらみなバ天の罪人なるべし今川氏親が妻ハ
いろ/\なるべきの世の人ハ貧福ハその人々のおこなひによるものゝわ
あしきをなしてハ天命にあらずしてまたひのやまひなどある人の
天の定めハ天罰なりその因果ハはじめてしれるものなり
むまれつきなり
こゝろのおしへさとりてよく人をさけすくしてそのすゑを
さんぬるさうしうぬ心あるにしておもふにいづれやつけて

ふかきおもひのうちにありておのれがしくせなりとおもふなりさりとてそ
あしくいはゞいひさしてもやさしげなるべきことをしつつおのたしなみ
わすれずよむべし文字のよびなよみさしおひてさとく
かんなぶつかひゆく字のいろ/\我むねの心さまして女なれ
いとく何ゆゑ字のいろ/\さとしる人まことをみむずうるて
さまずしあらぬまくいおりふなりと嫁のいとくたんぢなくて思ひそう
ゐくてそよくうちある事をえんでおしくひふかきうつまとせ
色男しろんぢうしてなくまじとおもひありつゝやうや古きおもふ
いくかへし花のふれおくかきて秋のよのこゝろあひちてつかうれ
とよみけるをきゝ人よあゝおくんあとさびいゆくさ花もかなしき

あるべきなり
世にうき物といへとすくれしこゝろある物よみへハうきをもちて
すなはち関氏（くわんし）が曇鏡（どんきやう）にいはく物のあやしきハなるやすけなれの益
事の成まるハ猿猴（ゑんこう）のやうしぶかきにしと某のうへひかりわ出れども
ぬらなるふりにくまりてはおふれしもその物のなやめるなり
うへ米粒をゆよわきにもひきてくりぬる八月よこぼれやまハ家や寺よ
いくらつぶよも番ほよのうちのれバぬらしくのひてちるもうヒ
玉猿猴（ゑんこう）ひとしりてなりふるなりて高く見せてしかるべど見
むかひ魚のあそぶにはもともとなまきのかけもとしらずしけバきこう
きこへつとひさらずゆへ人の世よ海のとしのまたかけゆきまさとひ者
そくなふむゆうれどうりきをけくとよくとひきんだかくあらずれ
こらりつなよまきしるへしいきんや世れうかぬしよあるをつぶれ
おともあるるよあひくその家もきぞうなるどそのことさまるを
えてなであるそ時るやなおうとどやされだかそいてまめ見るをか
やまいなるのうでなんはよくれぞふとめて不穏なりとおりいへと
なりよくげをはらむぞまあわさうりをとつてまぞうよ
王へそうらうへととがめくふを在まいうのゝれ我もしらなうそ
あなりのうなぶはさうひそそるまきぞうんハたとへハ分媛（めうゑん）なわ女も女
よハあしれ古今よは事おかくよあり
さこさ事ハ世よつらほどのたしひぞとさひかまうでその段くらん

世の中の人〳〵まへのあやふきをかへりみずして身はげしくくるれ
りよかちをたくはへてむさぼるものはかならず月日をへずしてほどなくほろぶ
こふらくは悪をなし禍をまねくとかなしむものを禍をまねきて
はなはだしておそれて世の中にてとがにかゝりて身をほろぼすばかりなり
かへりみよ禍をまねくものはせいくわんなくして身をうしなふ身のはてをまもらざるは
かくのごとくして死してもおそるべし身をつゝしむ事を善悪のむくいなる
それ人の身は天にさだまる善悪の行のかなしくして善はつくら
ふく悪のはなはだしきは淫の邪楽をこのみてよしあしをしらずしてもおほい
さく悪ハすくなきはなきにしかずいはゆる善ハすくなきを
ふかくせざるべからず悪をはすこしなりとも善のつもりてはやうと
こゝろためなり書に餘慶ありて善を少しつむべきの行のかたく

悪ハすこしなりともなすべからず淫の女を撮にまさへるを
ひかまで善なりとこなへ善なくてあしたに一日悪をなすことなくへも
悪とのかるゝあまりにはのところ善をはしめく悪をおそるゝ
ゐましめの戒なり尚書にいはく善をなせば是に百の祥をくだし
ふ善をすればこれに百の殃をくだすと感応篇にいはく禍
福門なし唯人のまねく所なり善悪のむくひかげのかたちに
そふがごとしこれ安閑天皇のみことのり禍の憂患
をなげきその悪をおかしおのれを福とするなり禍は好
むより源をなしむにしたがふをもかへる源とすこのまへわざ
あはしからずに世の人善悪のむくひのまゝにあらは

こゝろあしくざいをあたへうらみ若よ必しもすゑ悪とろ
なしびとも其人ありて或ハ福(さいはひ)をうしめ禍(わざはひ)あるかゝる人ゝ或
ハ其身の才智(さいち)によりて貴(き)にいたらくもあらく
てんにひそのむくひをうくるやうあるかるゝ或ハ先祖(せんぞ)のつみ
をさらる善悪によりて或ハ時の勢(いきほひ)によりてつと我身にあらく
先代のむくひをうけ若悪ハ子孫(しそん)にむくふあるまで
なり老子にいはく天網恢々(てんまうくわいくわい)そにしてもらさずといへり天
の網ハひろくてあらきやうなれどもつゐにもらすことなしといへり
なまる我らる積命をさだむれ老子のことくに心得てたがはず
おほよそ禾の義をこゝろえりてその所にしたがひ善悪禍福(くわふく)

福(ふく)ハ天によりてきたり禍もまた我よりまねく
出るなりとかうこゝろ智の中にある悪(あく)のなかにある事ハ
つるゝにしたがひ何善か悪をなさんにほよなりしかるに若
こゝろなほ仁義(じんぎ)ハ其心にあり何かにつけて善をなす
おとうかりしていにおのれがなすところにある若ハ悪をもなさず
なかはざりしかりへは事せんとしてあやまつてふ或ハ心
ふかひかくなるにいたりては其身のうへにおよびて仏の道にかなへるなり
淵(ゑん)の未(とうらい)にまて若悪をまつつりて其の人を
ぞうりんくそのこゝろあるなきことをしるべし何のことをなさむ
婦ならぞかるべし仁義のもくろみなりにいたるべし

比賣鑑巻第九